

# つないできたもの つないでいくもの

## — 学童疎開、もう一つの戦争 —

3か月だけ勉強に行くはずだった。

修学旅行気分ではしゃぐ子どもたち。

大きな船への乗船を喜び、

見知らぬ土地への期待感を抱いていた。

しかし、そこで待っていたのは…。

ヤーサン(ひもじい)、

ヒーサン(寒い)、

シカラーサン(寂しい)に

耐える日々でした。

あの子どもたちがつないできたもの、

今の子どもたちがつないでいこうとするものを

特集します。



浦添国民学校の学童たち

### 浦添市の学童集団疎開状況

● 浦添国民学校 引率教員など含み **130人** (児童 **120人**)

- 第1班 50人……宮崎県東臼杵郡富高町(現・日向市) 第一富高国民学校
- 第2班 50人……宮崎県東臼杵郡富高町(現・日向市) 第二富高国民学校
- 第3班 30人……宮崎県東臼杵郡岩脇村(現・日向市) 平岩国民学校

● 仲西国民学校 児童 **87人**

- 宮崎県西都県郡小林町(現・小林市) 宮崎県小林国民学校

太平洋戦争末期の1944年、それまで平和だった沖縄に日本兵が続々と配備され、沖縄戦に向けた準備が着々と進められました。そのようなか、沖縄での戦火から逃れ、次世代の戦力を温存することや軍の食糧確保対策の一つとして進められたのが学童疎開でした。

浦添からは、浦添国民学校と仲西国民学校の児童らが九州の宮崎へと疎開しました。

当初、3か月の間だけ勉強に行く間かされていた子どもたちは、憧れの大和への旅立ちに胸を躍らせていましたが、疎開生活は約2年にもおよび、その生活は大変厳しいものとなったのです。

### 命をつなぐために

学業の傍ら、勤労奉仕の日々。戦火を逃れて疎開した宮崎も決して安住の地ではありませんでした。近くに日本軍の飛行場があったこともあり、たびたび空襲を受けるなど、より安全な地へと再疎開を余儀なくされることもありました。国から支給されるお金や地元の人たちのもてなしなどで何とか生活していました。が、その生活は、戦況が悪化するにつれて困窮を極め、子どもたちは「ヤーサン(ひもじい)・ヒーサン(寒い)・シカラーサン(寂しい)」に耐える日々を過ごすしました。

それでもいつか故郷に帰る日を夢



浦添国民学校の疎開者たちは、自給自足の生活のために開墾して作った農場を「愛汗学園」と名付けた。

見て、先生や子どもたちは「自分たちのものは自分で作り出す」ことを目標に掲げ、山間部などを開墾し、農業、家畜飼育、塩づくりなど、生きるために考え得ることを全て尽くして、2年1か月の疎開生活を乗り越え命をつないだのです。



対馬丸撃沈のイメージ絵

### ■対馬丸撃沈による犠牲者

疎開者	学童	784人
	訓導・世話人	30人
	一般疎開	623人
船員		24人
船舶砲兵隊員		21人
合計		1,482人

### 『学童疎開思い出の記』

— 主として第三班の記録から —  
(石川盛栄)

ある夜、雨の降り続く中に、空襲警報が鳴りました。

1回目は雨の中を、防空頭巾をかぶって、避難しました。1回目の警報が解除になって、やれやれと思いがながら、宿舎にもどって床につきました。それからどれほどの時間がたったのだろうか。かすかに2回目の空襲警報を聞きました。雨は降りしきるし、睡魔にはおそわれるし、「避難だ」と思いつつも、吸い込まれるようにずるずると眠りの中に落ちていきました。(中略)目が覚めた時は、雨はもうやんでいましたが、あたり一面田畑には水が溢れていて、起き上がり防空壕に行ってみると、陥落してつぶれていました。雨や疲れや睡魔にもめげずに2回目の避難をしていたら、一体この30名の疎開者たちはどうなっていたのだろう。(中略)思い出すたびにぞっとして胸が寒くなるばかりであります。

浦添市立図書館 所蔵

### 疎開の悲劇

1944年8月21日、対馬丸は学童疎開の子どもらに乗せて駆逐艦などと船団を組んで那覇港を出港し、鹿児島県悪石島付近で米潜水艦ボーフィン号による魚雷攻撃を受け沈没した。多くの人たちは船内に取り残されたまま対馬丸とともに海の底へと沈み、多くの犠牲者を出しました。